

国語

氏 名	
-----	--

受験上の注意

1. 試験時間は、50分間です。
2. 答えを書き始める前に、問題用紙には氏名を、解答用紙には座席番号・受験番号・氏名を書いてください。
3. 字数制限のある問いでは、句読点や符号（ 、 。「 」など）も1字と数えます。
4. 印刷が読みにくかったり、解答用紙が破れたりした場合は、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
5. 気分が悪くなったときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
6. 問題を解き終わっても、途中退室はできません。

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ユウランセンで湖を一周する。
- ② ユウシュウの美をかざる。
- ③ 高いケンシキを備えた人物。
- ④ ウンカイの上に日の出が見える。
- ⑤ 友のアンピを尋ねる。
- ⑥ 二つの委員をケンニンする。
- ⑦ 約束にソムく行動だ。
- ⑧ 布をタつ。

問二 次の慣用句・ことわざを含む文について、☐に当てはまる漢字一字を答えなさい。

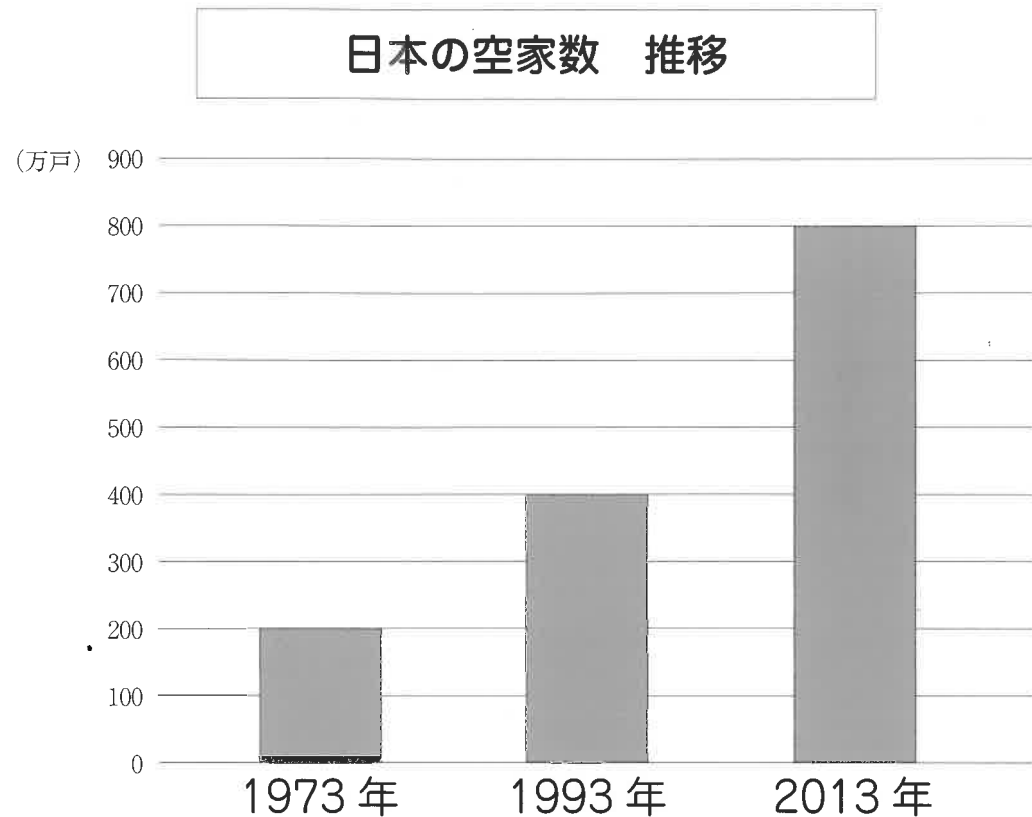
- ① 対戦相手が強すぎて全く☐が立たない。
- ② このチームは、監督が手☐に掛けて大切に育ててきた。

問三 次の各文の――部が直接かかる部分を以下の例のようにぬき出しなさい。ただし、句読点を含みません。

(例 雨が降ったので、洗濯物がぬれた。 答え 降ったので)

- ① 毎日、牛乳を取りに行くのが、私の仕事だ。
- ② 私は、次第に秋の色が深まるこの時期が好きだ。

問四 次のグラフ中の日本の空家数の変化に着目し、そこから読み取れることを一つあげ、四十字程度で書きなさい。その際、(注意事項)の1・2にしたがうこと。



【総務省 住宅・土地統計調査】をもとに一部改変

- (注意事項)
- 1 文の主語を明らかにすること。
 - 2 数字を表記する際、次の例を参考にする。
- (例 三百万戸 一九八五年 二〇〇〇年)

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「雑草はたくましい」と評される。そして人びとは、雑草の強さにあこがれる。

ところが、植物学の分野では、雑草は強いとはされていない。

I 雑草は、「弱い植物である」とされているのである。

自然界は、A である。強いものが生き残り、弱いものは滅び去っていく。

植物のなかにも生育が旺盛で、ほかの植物を圧倒する強いものがある。

お山の一本杉のようなものがその典型だ。ほかの植物を駆逐して、最後に生き残ったのが、一本杉なのである。

あるいは、深い森の中に生い茂る巨木たちは、生存競争の勝者たちだ。

タンポポやスミレのような雑草は、暗く深い森の中に暮らすことはできない。「雑草」と呼ばれる植物は、ほかの植物との生存競争に

して「弱い植物」なのである。

① ② それでは、世の中がすべて、強い植物ばかりになってしまいかといえ、かならずしもそうではないのが自然界のおもしろいところだ。

じつは、「強い植物」が力を発揮できない場所があるのである。

それは、「予測不能な環境」である。

強い植物は、安定した条件で力を発揮する。ところが、なにが起るかかわからないという不安定な状況では、力を発揮することができないのである。

サッカーの試合を考えてみよう。

芝は天然芝の最高のコンディション。お天気は快晴で、風もない。誰だって、そんな恵まれた条件で試合をしたいと願うだろう。

この恵まれた条件のなかで、プロのサッカーチームと、小学生チームが対戦したとしたらどうだろう。結果は見るまでもない。プロのサッカーチームが勝つに決まっているだろう。

ところが最悪のコンディションを考えてみよう。天気は大雨。風も吹き荒れている。グラウンドは、ドロドロにぬかるんでいて、水たまりさえたくさんある。

そんな恵まれない条件でサッカーをやるのは、誰だってイヤである。

しかし、そんな不安定な条件で試合をしたとしたら、どうだろう。
もしかすると、番狂わせの可能性が出てくるかもしれない。

そして、小学生チームが、練習の条件に恵まれず、いつも泥んこの河川敷のグラウンドで、強い風が吹きすさぶなかで練習を積み重ねて
いるとしたら、どうだろう。

弱いはずの小学生チームが、強いはずのプロのチームに勝つ可能性は高まるだろう。

雑草の立つ瀬もまさに、そこなのである。

誰だって恵まれた環境で勝負したい。しかし、安定した環境で勝負を挑んでも、弱い植物が強い植物に勝つことはできないのだ。

②

弱い植物である雑草は、強い植物が力を発揮できない予測不能な環境に、活路を見出した。

予測不能な環境で成功するために必要なものは、強い植物に勝つ「力」ではない。予測不能な環境を克服する「知恵」なのである。
これが雑草の生き方の基本的な哲学である。

逆境は誰にとつてもいやなものである。しかし、逆境があるおかげで、弱い植物である雑草に成功のチャンスが訪れる。

逆境さえ、乗り切ることができれば、逆境は自分たちの成功を約束してくれる条件となるのである。

恐竜がいた時代は、地球の歴史のなかでもっとも安定した環境であった。

気候は温暖で、地殻変動もない。そんな時代には、力がすべてだった。

恐竜たちは、こぞって大きさを競った。植物たちも大型化し、ツクシの仲間が何十メートルもの高さまで、そびえ立っていたので
ある。

(ア)

雑草と呼ばれる植物の祖先が現れたのは、氷河期の終わりごろであるといわれている。氷河の跡にできた不毛の土地が、彼らの最初の生

息の場だったのである。

そして、氷河期が終わり、環境が大きく変化する不安定な時代になると、洪水が頻繁に起こる河原や土砂崩れ後の山の斜面など、予測不
能で、大型の植物が生えない場所が出現した。そこが雑草の棲みかとなっていたのである。

(イ)

木が切られ、村ができると、人びとに踏みつけられたところは大きな植物は生えることができない。森が拓かれ農耕が始まると、土は耕
され、草取りもおこなわれる。こうして人間が環境を改変し、次々と予測不能な環境が作られたのである。

(ウ)

新石器時代の遺跡からは、すでに雑草の種子が発掘されている。人類が人間としての歴史を刻み始めたとき、そこには、もう道ばたの雑
草があったのである。

そして、人類が生息環境を広げていくにつれて、雑草たちもその分布を広げていった。いまや雑草は私たちの身の回りの、ありとあらゆ
るところを棲みかとしている。

好むと好まざるとにかかわらず、雑草は私たち人類とともに、繁栄を遂げてきたのである。

(エ)

雑草は予測不能な乱世を好む植物である。いまや、身の回りは「予測不能な環境」であふれている。まさに雑草たちの時代がやってきた
のである。

人類が作りだした都市という環境は、特殊な環境である。

土もなく、水も少ない。人や車が、引っこりなしに通っていく。自然界を生きる植物にとって、都会はけっして「住みやすい場所」とは
言えないだろう。

しかし、過酷な環境であるということは、それだけ敵が少ないということである。ライバルとなる植物も少ないし、生存を脅かすような
害虫も少ない。

Ⅱ、都会という厳しい環境に適応することさえできれば、そこはライバルも天敵もない楽園となるのである。

ナンバー1の実力を持つ強い植物にとって、都市は住むべき環境ではない。しかし、**A**の生存競争のなかで、勝ち抜くことのできない弱い植物たちにとって都市は、生存の可能性がある魅力的な場所である。

逆境に挑む「雑草」と呼ばれる植物にとって、都市は、生き残り戦略が試される場所である。

ライバルとなる植物はいない。ただ求められるのは、都市という厳しい環境を乗り越える知恵なのである。

「ニッチ」というと、ビジネスの世界では「隙間」のような意味で使われることが多い。**Ⅲ** 大きな市場と、大きな市場の隙間にある、小さな市場がニッチといわれる。

生態学では、ニッチというのは、「生態的地位」という意味で、本来はある生物種が生息する環境を意味する言葉である。

※2 マーケティングの世界でいう「ポジショニング」という言葉が、これと似ているだろう。

自然界の生き物は、自分たちの生息場所をポジショニングする。このポジショニングができない生物は生き残ることができないのである。強い植物は、安定した環境である深い森がニッチである。そうではない植物たちは、強い植物のいない場所をニッチとしなければならない。

サボテンはライバルのいない砂漠というニッチを選んだ。高山植物はライバルのいない氷雪の地をニッチとして選んだ。

そして、雑草と呼ばれる植物は、予測不能な環境をニッチとして選んだのである。しかし、雑草も種類によって、生える場所がだいたい決まっている。

じつは畑というのは、雑草にとって過酷な環境なのである。いつ耕されるかわからないし、いつ抜かれるかわからない。そういう条件を克服した雑草だけが、「畑の雑草」となることができるのである。

実際に観察してみると、畑の中に生えている雑草と、畑のまわりに生えている雑草は種類が違う。畑のまわりの雑草は、畑の中に生えることができないものが多いのである。

公園を見ても、芝生に生えている雑草と、花壇に生えている雑草では種類が違う。

歩道を見ると、よく踏まれる歩道の真ん中に生えることができる雑草と、歩道には生えることができずに、植え込みなどに生えている雑草がある。

それぞれの雑草は、自分のニッチをしっかりとポジショニングしているのである。

こうして環境に適応し、スマイレもタンポポも、およそこの世にある雑草は、すべて環境を克服し、自分の居場所を見つけた「勝ち組」なのである。

逆にいえば、自分の居場所を見つけることのできなかった植物は滅んでいく。負け組の生存を許すほど、自然界は甘くはない。

そして、どんな雑草にも、明確なポジショニング戦略があり、かならず、その居場所で生き抜くための戦術があるのである。

(稲垣 栄洋『都会の雑草、発見と楽しみ方』による)

※1 駆逐……敵対するものや邪魔なものを追いはらうこと。

※2 マーケティング……商品を売り買いする仕組み。

問一

Ⅰ

Ⅲ

に当てはまることばとして適当なものを、それぞれ次のア～オの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ただし、同じ記号を二回以上選ぶことはできません。

ア ところで イ もし ウ つまり エ むしろ オ かし

問二 二カ所の

A

に当てはまる共通した四字熟語を答えなさい。

問三

――部①「世の中がすべて、強い植物ばかりになってしまふ」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。次の文の□に合うように、本文中のことばを用いて、四十字以内で答えなさい。

自然界は、

と考えることもできるから。

問四

B

に当てはまる最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 審判は雨の中で仕事をしたことが無いので、うまく笛を吹くことができない。泥だらけのグラウンドで審判を務めた経験も無いので、うまく走れない。
- イ 強く降る雨でボールがどこにあるのかもわからないし、味方の位置も見えない。風に飛ばされてボールもどっちへ転がるかわからない。
- ウ 小学生用のグラウンドでは狭いので、テクニックがいかせない。ボールも小学生用だとサイズが小さいので、うまく蹴れないかもしれない。
- エ 成長途中の小学生に本気を出してしまうとけがをさせてしまうかもしれない。応援する人たちも小学生チームを味方するに決まっている。

問五

――部②「弱い植物が強い植物に勝つことはできない」とありますが、「弱い植物」が自然界で生き残っていくためには何が必要ですか。そのことを説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

強い植物が力を発揮できない

ア

☐ ☐ ☐ ☐ ☐

(五字)

環境と、それを乗り越えるための戦略や戦術を生み出す

イ

☐ ☐

(二字)

が必要となる。

問六

――部③「安定した環境」とありますが、「強い植物」にとっての安定した環境の例として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 安全に車や自転車が走れるようなコンクリートで舗装された道路。
- イ 土を耕して肥料をまき、栄養分・水分をたくさん含ませた畑。
- ウ 気候が穏やかで、地震や火山活動が起こらない山間部。
- エ 公園や学校のグラウンドなど、子供たちが安全に遊べる場所。

問七

この文章から次の一文がぬけています。この一文が入る最も適当な部分を、文章中の(ア)～(エ)の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ところが、人間が現れると、雑草の生活は一変する。

問八 部「ニッチ」とありますが、これについて大宮開成中学校の生徒が話し合いました。後の各問いに答えなさい。

大場さん 「ニッチ」っていうのは、ビジネスの世界では「隙間」^{すきま}のような意味で使われることが多く、生物の世界では自分たち

[illegible]

宮沢さん
そうだね。弱い植物は自然界で生き残るために、他の強い植物たちのいない「ニッチ」を探しているんだろうな。どん

なにか
□ □ □ □ □
イ
(五字) であつたとしても、適応することさえできれば、弱い植物にとつて

[illegible]

開藤さん
そう考えると、今生えている雑草もそれぞれの環境を克服し、「ニッチ」としての自分の **工** (三字) を見つけ

ることができた植物なんだね。だから、筆者は雑草も自然界の「勝ち組」と言っているんだね。

成田さん
そうだね。弱い植物とされている雑草が強い植物に負けずに自分の「ニッチ」を見つけたからこそ、筆者は

X
 つて表現を使っているんじゃないかな。

(i) アゝエの□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

(ii)

X

 に当てはまることばとして最も適当なものを、本文中の波線部 (a) ～ (d) の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

で答えなさい。

問九 本文の内容に関する説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 雑草の歴史と人類の歴史を説明することで、人類の繁栄はんえいと雑草の繁栄が密接に関わっていることを印象づけている。

短文を多く用いることで、知識の少ない子供たちでも難解な研究内容を理解できるように易しく説明している。

ウ 我々の身近にある雑草について理解を深めるために、各所に科学的な根拠を用いて雑草の強さを印象づけている。

工 読者も知っている雑草に関する具体例を複数挙げることで、馴染みのない雑草の研究成果を分かりやすく説明している。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一か月ほど前に「少年」は都会から引越してきた。当初、クラスのみんなは少年の周りに集まってきたが、少年の発言がもとで関係が悪くなってしまった。特に男子のリーダー格のヨッチちゃんとは親友になりたいと思っていたが、この一週間で気まずくなっている。ある日、少年が自転車で町の探検をしていると、団地の一室のベランダに掛けられたこいのぼりが風に飛ばされてきた。こいのぼりを拾って届けると、寂しそに見えるおばさんが出てきて、家の中に少年を招き入れた。

1 おばさんの息子は、タケシくんという。三年生の秋、交通事故で亡くなった。生きていれば東小学校の五年生——少年と同じ五年二組だったかもしれない。仏壇に供えられた超合金ロボやトレーディングカードは少年の好きなものと一緒だったから、仲良しの友だちになれた、かもしれない。

5 おばさんは東小学校のことをあれこれ教えてくれた。髪の毛の薄い校長先生のあだ名が「はげっち」だということ、秋の運動会に親子競技があること、冬になるとクラスでストープ委員を決めること、学校のプールは真ん中が深くなっていて背が立たないかもしれない、ということ……。

ヨッチちゃんの名前が出た。胸がどきんとした。タケシくんのいちばんの友だちはヨッチちゃんだったらしい。

「ヨッチちゃんと同じクラスなの？　じゃあ、もう友だちになったでしょ。あの子元氣だし、面白いし、意外と親切なところもあるから」

10 タケシくんが小学校に上がって最初に仲良くなったのがヨッチちゃん、最後まで——いまでもヨッチちゃんは、ときどき仏壇にお線香をあげに来てくれるのだという。

「ヨッチちゃん、いろいろ面倒見てくれるから、すぐに友だちになれたでしょ」

少年は黙ってうなずいた。一週間前までは、確かにそうだった。通学路の近道も、学校でいちばん冷たい水が出る水飲み場の場所も、教室を掃除するときの手順も、ぜんぶヨッチちゃんに教わった。

「そうかあ、ヨッチちゃんと友だちかあ……」

15 おばさんはうれしそうに微笑んで、しみじみとつぶやくように言った。勘違い——でも、そんなの、打ち消すことなんてできない。

「じゃあ、タケシとも友だちってことだね」

おばさんはもつとうれしそうに言った。

少年がしかたなく「はあ……」と応えると、玄関のチャイムが鳴った。

外からドアが開く。

20 「おばちゃん！　こいのぼり、黒いのがなくなってる！　飛んでったんじゃないの！」

玄関に駆け込んだのは、ヨッチちゃんだった。

5時のチャイムが鳴るまで、少年はヨッチちゃんと一緒にタケシくんの家にいた。おばさんに「やろう、やろう」と誘われて、三人でテレビゲームをした。タケシくんの家にあったゲームはみな、少年も三年生の頃に遊んだものだった。タケシくんが生きてれば友だちになったよな、絶対そうだよな、と少年は思う。去年発売されたシリーズの新作はもつと面白い。タケシくんが生きてれば絶対にハマっただろうな。ヨッチちゃんはゲームがうまかった。少年といい勝負——勝ったり負けたりを繰り返す二人を、「ひさしぶりにゲームすると、指と目が疲れちゃうねえ」と途中から見物に回ったおばさんは、にこにこ微笑んで見つめていた。

ヨッチちゃんと仲直りしたわけではない。ヨッチちゃんは家に入って少年を見たとき、一瞬、なんでおまえなんかがここにいるんだよ、という顔をした。少年も、しょうがないだろ、とにらみ返して、そっぽを向いた。

30 おばさんがジュースのお代わりを取りに台所に立ったとき、「さっさと帰れよ」とヨッチちゃんに小声で言われ、肩を小突かれた。

少年も最初はそうするつもりだった。おばさんに嘘がばれるのが嫌だったし、嘘をついたままタケシくんの写真に見つめられて遊ぶ自分が、もつと嫌だった。

でも、おばさんはジュースを持って戻ってくると、二人に言った。

「タケシも喜んでるわよ、ヨッチちゃんに新しいお友だちができて」

35 帰れなくなった。頬が急に熱くなり、赤くなって、そこからはいままでも以上にゲームに夢中になったふりをした。ヨッチちゃんも、ゲーム

のコントローラーを動かしながら、ときどき、テレビの画面を見つめたまま話しかけてくるようになった。そんな二人を、おばさんはずっと——ほんとうにずうっと、にこにここと

A

見つめていた。

先に「さようなら」と言った少年が団地の建物の外に出て、ヨッチちゃんはなかなか出てこなかった。放っておいて帰るつもりで自転車にまたがったが、このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった。困ったなあと思ってタケシくんの家のベランダを見上げていたら、窓が開いて、おばさんがベランダに顔を出した。少年に気づくと、「ちよっと待っててね」と笑って声をかけ、フェンスからこいのぼりの竿をはずした。

⑤ しばらくたって外に出てきたヨッチちゃんは、真鯉だけをつないだ竿を持っていた。

「すぐ帰らないとヤバイ？」

少年に顔を向けずに訊いた。

45 「べつに……いいけど」

「片手ハンドル、できる？」

「自転車の？」

簡単だよ、そんなの、と笑った。道が平らだったら両手を離しても漕げる。

ヨッチちゃんはいいのほりを少年に渡した。

50 「おまえに持たせてやる」

「……どうするの？」

「ついて来いよ。タケシのこいのほり、ぴんとなるように持ってるよ」

そう言っ、自分の自転車のペダルを勢よく踏み込んだ。

B

追いかける。風を呑み込んだこいのほりは、尾びれまでぴんと張って泳ぎはじめた。意外と重い。しっかりと

55 と竿を握っていないと、飛んでいってしまいそうだ。

ヨッチちゃんの自転車は団地を抜けて、細い道を何度も曲がっていく。片手ハンドルの運転ではなかなかスピードを上げられない。ヨッチ

んも途中でブレーキをかけたり自転車を止めたりして、少年を待ってくれた。「かわってやろうか」と言われて、「ぜんぜん平気だよ」と応えると、ふうん、と笑われた。いままでとは違う——転校したての頃とも違う笑い方だった。タケシくんと一緒に笑った頃もこんなふうに笑っていたのかもしれない。そう思うと、急にうれしくなり、でも急に悲しくもなって、竿をぎゅっと強く握りしめた。

河原に出た。空も、川も、土手も、遠くの山も、夕焼けに赤く染まっていた。

ヨッチちゃんは土手のサイクリングロードに出ると自転車を止め、少年からこいのほりを受け取った。

「俺ら……友だちなんだって？」

少年は、ごめん、とうつぶした。おばさんが勝手に勘違いしただけだ、とは言いたくなかった。

65 「べつにいいけど」

ヨッチちゃんはまたさっきのように笑って、手に持った竿を振ってこいのほりを泳がせた。

「タケシって……すげえいい奴だったの。サイコーだった。俺、いまでも親友だから」

「……うん」

70 「でも……おばさん、もう来るなって。ヨッチちゃんは新しい友だちをどんどんつくりなさい、って……そんなのやだよなあ、関係ないよなあ、俺が友だちつくるのとかつくんないのとか、自分の勝手だよなあ……」

C

竿を振り回す。こいのほりは身をくねらせ、ばさばさと音をたてて泳ぐ。

「こいのほり、ベランダからだど、川が見えないんだ。俺らいつも河原で遊んだから、見せてやろうかな、って」
へへっと笑うヨッチちゃんを、少年はじっと見つめた。ヨッチちゃんはそのまなざしに気づくと、ちよっと怒った顔になって、「拾ってくれてサンキュー」と言った。

75 少年は黙って、首を横に振った。

「あそこの橋渡って、ぐるーっと回って、向こうの橋を通って帰るから」
向こう岸を指さして言ったヨッチちゃんは、行こうぜ、とペダルを踏みこんだ。

ハンドルが揺れる。自転車が道幅いっぱいに蛇行する。片手ハンドルで自転車を漕ぐのは、あまり得意ではなさそうだ。

少年はヨッチちゃんの自転車に並んで、手を差し伸べた。「持つてやろうか」と声をかけると、ヨッチちゃんは少し間を置いて「悪い」と竿を渡した。「べつにいいよ」と竿を受け取ったあと、ほんとうはもっと別の言葉を言わなきゃいけなかったのかもな、と思った。でも、そ

ういうのって、いいんだよ、もう、と竿を持った右手を高く掲げた。

こいのぼりが泳ぐ。金色にふちどられたウロコが、夕陽を浴びてきらきらと光る。

ヨッチちゃんの自転車が前に出た。少年は友だちを追いかける。右手で、DのDを握りしめる。振り向いたヨッチちゃんが、「転ぶなよお」と笑った。

(重松 清の文章による)

問一 ――部①「胸がどきんとした」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「少年」と初対面である「おばさん」が、知るはずのない「ヨッチちゃん」のことまでよく知っていたから。
- イ 「ヨッチちゃん」のことを親切だと言っているの、「おばさん」が「ヨッチちゃん」の味方だと分かったから。
- ウ 転校したての頃は仲が良かったが、今は気まづくなっている「ヨッチちゃん」の名前が突然出てきたから。
- エ 「おばさん」の息子の「タケシくん」は、「ヨッチちゃん」のいちばんの友だちであったと知ったから。

問二 ――部「しみじみと」の本文中での意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア おおいに感動して
- イ 繰り返し繰り返し
- ウ 目に涙を浮かべて
- エ 深く心に感じて

問三 ――部②「しょうがないだろ」とありますが、この時の「少年」の状況を説明した次の文のに当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

- 「少年」は、「おばさん」の「ヨッチちゃん」はア (二字) を見てくれるか」という質問に、うなずいたつもりだった。しかし、「おばさん」は「少年」が「ヨッチちゃん」とイ (七字) ということにならずいたとウ (三字) して、エ (五字) に微笑んだ。さらにそのウから「おばさん」は「少年」がオ (八字) だと考え、いつそうエにするので帰れなくなってしまった。

問四 ―部③「そうするつもり」とありますが、「少年」がそう思っていたのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「タケシくん」の家で、「少年」は寂しそうにしている「おばさん」とようやくうちとけてきたが、そこにやってきた「ヨッちゃん」のことを「少年」は苦手にしているため不愉快ふゆかいになったから。
- イ 「タケシくん」と友だちだという嘘うそによって、久しぶりに「おばさん」が楽しそうに過ごせるようになっていたのに、「ヨッちゃん」が来たことでそれが嘘だと知られてしまうと思ったから。
- ウ 勘違いを繰り返す「おばさん」を傷つけないように配慮はいりょしていたが、「おばさん」はただただ幸せそうに笑うだけで、「少年」の気づかいに全く気付いてくれず空しく思えてきたから。
- エ 「おばさん」の喜びを裏切ってしまう不安感から家にいたものの、本当の友だちでない「タケシくん」の写真の前で嘘をつき続けるのが嫌で、「おばさん」の家に居づらくなっていたから。

問五

A

、

B

、

C

に当てはまることばとして最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア うやうやしく イ 悔くやしそうに ウ あわてて エ うれしそうに

問六 ―部④「このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

「ヨッちゃん」はゲームをしながら

ア

--

--

--

--

--

--

 (七字) ようにはなったが、しっかり

イ

--

--

--

 (三字) をした

わけではないので、気持ちがすっきりしていないから。

問七 — 部⑤「真鯉だけをつないだ竿を持っていた」とありますが、これについて大宮開成中学校の生徒が話し合いました。次の会話文

の□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

先生 「ヨッちゃん」はなぜ真鯉だけをつないだ竿を持っていたのでしょうか。

大場さん 「少年」と「ヨッちゃん」は竿を持って、川に向かったんですね。

宮沢さん 「ヨッちゃん」はその川について、「タケシくん」と「いつも河原で□□□□(四字)」って言っているから、二

人にとって思い入れの深い川だったんだらうね。

開藤さん 真鯉は、「タケシくん」の家のベランダからだ□□□□□□(六字)から、「ヨッちゃん」は持って来たんじゃないかな。

ないかな。

大場さん そうか、「ヨッちゃん」は「タケシくん」の家の真鯉を、二人がいつも□□□□□□(六字)という思い出の場所に連れて行っ

たんだ。

先生 そうですね。みなさん良いところに気がつきましたね。では、ここでの真鯉はどういう意味をもっているのでしょうか。

成田さん 分かった。この真鯉は単なる真鯉ではなくて□□□□□□(五字)を象徴しているんですね。

問八 — 部⑥「強く握りしめた」とありますが、この時の「少年」の様子として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 「おばさん」の家から出てきた「ヨッちゃん」に、「少年」は気持ちの良い笑い方を見せることができるようになった。しかし、「ヨッちゃん」との仲を取り持つてくれた「タケシくん」はもういないということを実感し、寂しくなっている。

イ 「少年」には、「ヨッちゃん」と親密になれてうれしいという気持ちと、「タケシくん」を失った「ヨッちゃん」がかわいそうだという気持ちとが同時に起こった。「少年」は、そうした感情が表にあふれ出そうになっているのを抑えている。

ウ 「少年」と「ヨッちゃん」は「おばさん」の家から真鯉のつなげた竿を持ち出した。けれども「タケシくん」の家の真鯉は思っていた以上に重く、風を受けてどこか遠くに飛んで行ってしまいそうなので力を込めて必死にこらえている。

エ 「おばさん」の家で「少年」と「ヨッちゃん」はぎくしゃくしていたので、「おばさん」は「少年」が出ていった後、「ヨッちゃん」をさとした。「おばさん」のこの行動によって「ヨッちゃん」と仲良くなれて、「少年」は「おばさん」に心から感謝している。

問九 — 部⑦「そういうのって、いいんだよ、もう」とありますが、「少年」がそう思ったのはなぜですか。自分で考えて、二十五字程度で答えなさい。

問十 二か所の□には同じことばが入ります。当てはまることばを本文中から三字でぬき出しなさい。

問題は以上です。



國語

—

問		
⑦	④	①
＜		
⑧	⑤	②
っ		
	⑥	③

[illegible]

三

[illegible]

座席番号
受験番号
氏 名